

桜蔭俳話会 五月句会(第三〇五回) 桜蔭会館
平成二十四年五月二十七日(日)

【秀句鑑賞】

雑草の命したたか夏来たる 溪水

夏期の農作業や庭仕事の最大の敵は雑草である。抜いても抜いても三日もすれば出てくる雑草には、ほとんど手を焼く。「雑草のしたたか・・・」だけであれば、雑草を毛嫌いする普通の俳句に終わってしまうところであるが、掲句を佳句たらしめているのは、「したたか」の前に「命」を置いたことである。ここには人間を含めて生きている全てのものに対する慈しみがある。昭和天皇は「雑草」という名の草はないと言われたが、生きているものは、その存在において皆等価なのである。「命したたか」は、強い生命力に対する賛歌あるいは率直な憧憬の表出である。

【秀句鑑賞】

二階から素直な返事豆御飯 秀一

「夕食は豆御飯だよ」との事前の会話があってもなくても、炊き上がるにつれて、特有の甘い香りは二階にも届いている。豆御飯が好物の二階の家人はその匂いに心待ちしている。「さあ食事にしましょう」との声掛けに返事は素直に「はい」。作者と家人との心の通った良い人間関係が垣間見える。

【自句自解】

一瞬の宙の金環朴の花 守

二つの天体の直径と公転軌道そして三つの天体間の相対距離の偶然によって、限られた地域と時間に繰り広げられる壮観な天体ショー。まさに神の配剤という他はない。金環日食を寿ぐように朴は高みに白き大輪の花を開き、さらにその上のたか空の雲の切れ間に、歓声とともに奇跡の金環が一瞬現れたのである。

【秀句鑑賞】

鬚やと結へて序二段若楓 貞勝

大相撲は、巨体の持ち主同士の単なる格闘技でない。そこには長年の伝統によって培われた礼節と様式美がある。現代風俗からは全く遊離して、禪一丁の裸

で闘う力士の姿に美意識を持つのは、日本人独特の感覚かも知れない。この様式美の一つの源は力士の髷にある。髷に手を掛けて相手を倒すことは禁じ手になっており、力士は髷を落として現役を引退する。

このように髷は力士の象徴であり命である。入門から前相撲を経てやっと髷を結えるほどになった力士の卵がいる、序二段から大関、横綱に登りつめるまでの道程は非常に険しいが、希望をもって相撲の世界に飛び込んで来た若者は輝いている。若楓との配合は巧い。

【秀句鑑賞】

母の日やあらがひし日の遠かりき 友子

母の日を季語に置く俳句は、母親にまつわる出来事をベースにした追憶・回想の句になることが多いが、これは季語の本意上致し方ないのかも知れない。いわんや掲句のように誰にでもあった共通体験に基づくものであれば尚更のこと。この世界を否定するものはいない。

【秀句鑑賞】

金環食一点へ向く初夏の街 ヤエ子

まさに日本列島中が世紀の天体ショーに湧き立ったときの句である。人々の関心は、浮遊状態にある政治や陰りを見せ始めた経済状況にはない。それらの問題は敢えて頭の片隅に追いやって、その限られた時間、街中の人々の目の焦点はただひとつ、金環日食に注がれたのである。「一点」の集約修辭が効いている。

【秀句鑑賞】

新緑の谷の底より湧き上がる ツル子

作者は山路を来て谷底を覗いた時の印象として、新緑が湧き上がって来たと断定している。普通であれば、湧き上がって来るようだったとの婉曲表現をとるところであるが、敢えて断定表現をとることによって、圧倒的な新緑の実存を読み手に感じさせることができる。俳句は単なる事実の報告ではなくて、事実を作者自身の詩的フィルターを通して表現するものなのである。

【秀句鑑賞】

たんぽぽや黙して意思を貫く子 ヤエ子

根が張って抜き取り難い蒲公英の茎の連想するにせよ、吹けばすぐ飛ぶ蒲公英の絮を連想するにせよ、親に怒られても自分の意思を曲げない子と蒲公英との取り合わせは絶妙である。蒲公英を柔らかく「たんぽぽ」と平仮名で表記したのも良い。親子の関係は煮詰まった状態でないことが感じられる。五月例会は夏の季語で出句するという枠があるので少し躊躇を感じたが、心理的な親子の関係をたんぽぽに仮託して表現したのは良い。

【秀句鑑賞】

菊根分時計の針は二廻り 幸

秋に咲く花を思い浮かべながら菊の根分け作業に二時間ほどの時間を費やした。気がつけば「針は二廻り」ということによって、その作業を楽しみながら行っている様子が窺える。このごく自然な詠み方が良い。

【秀句鑑賞】

ととのひし庭にひときは夏紅葉 真三

日本庭園では、造園者によって選抜かれた樹木や草花が名石や人工物とともに池水の周りに巧みに配置されている。庭は管理者によって常に最善の状態に整えられ、地面は綺麗に掃き清められている。

作者が訪れたとき、地面には夏落葉が散乱していた。作者はこの夏落葉に注目する。植物は生の営みとして葉で炭酸同化作用をしているが、その機能を喪失した葉は、樹木本体の負担を減らすために自ら枝先より離れ、落葉となる。これは自然の摂理である。

作者は、掃き清められて整然とした庭も良いが、生と死が共に存在することを観てとれる庭こそが、本然の庭であると言っているのではないか。

文責：代表 増田 守